

香川修庵

不食の証。また殆ど奇疾。古今の医書、未だ明らかに言及する者有らず。予が見及する所を以て、既に三十人に余る。多くは是れ婦女にして男子は、只だ二三有るのみ。その証、他に苦とする所無し。只だ杭食を思わず。或いは麦飯、或いは糯米粉、或いは赤小豆、或いは豆腐屑を食らい、或いは偏に一種の蒸果を好み、或いは終日食餌を喫らわずして飢えず。数日自り数月に至り、以て数年に及ぶ。然も形体痩せず、脉多くは平緩。間々或いは癥に苦しみ、或いは痞し、或いは痛む。若し強いて之に食を与えれば、必ず吐す。吐さざれば必ず痛む。之に湯薬を投ずるに、また多く吐す。吐さざれば則ち薬氣胸中に満ち、煩悶すること多し。其の証、万態縷かく挙ぐべからず。医人此の証を知らず、強いて妄りに薬を投じて、之を攻め之を補し、病家もまた其の食らわざること恐れ、医を延き巫を請い、屢々薬して益々逆し、嘔吐甚だ劇しく、痛苦いよいよ多く、幾ど委頓に至りて止む。此の証に遇う者、措きて治せざるを以て、乃ち真の治法と為す。第一、瘦ならざるを以て佳兆と為す。其の次、脉平緩にして、小便順利、月血滞らず、皆無病の候なり。苟し能く法を守り、外邪襲を防げば、只だ其の好む所を聴き、少少之に食を与え、自然に回復するを待ちて可なるのみ。

今予が見る所を挙げ、以て異聞を広む。苟し能く此れに拠つて以て焉を処置すれば、則ち其れ違わざるに庶し。

一室女、年十六、只だ雪花菜を食らうのみにして、其の他は一切食らわず。父母之を憂い、予に診視を請う。其の皮肉瘦せず、色沢鮮明、脈平緩。予曰く、憂うるなかれ、久しからずして、將に平生に復せんとす。此の時已に半年の所、予また曰く、必ず薬するなかれ。若し薬を投ずれば即ち諸患蜂起せん、と。其の父母堅く予の言を守る。一年余、自然に常食に復す。(168字)

都下の鮫舗の婦、年三十に近くしてこの証を患う。日日喫らう所、止だ三品のみに、蓮藕なり(煮熟して豆油・味噌もて調食す)。赤小豆なり(煮熟して少鹽もて調食す)。若し無くんば代わり(煮熟して少鹽もて調食す)。洲濱餅なり(蒸果なり。黄大豆熬し、粉にして、洲濱と名づく)。是の如く水際の状と作す。故に洲濱と名づく)。是の如く十一年、忽ちに工匠の午飯を喫らうを觀、食らわんと欲するの意を興す。以來常食に復すこと平昔の如し。